

令和 6 年 5 月 14 日現在

機関番号：35307

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20041

研究課題名（和文）書物と権力の関係に注目した太閤記物散文作品群の体系化 近世前期から中期を中心に

研究課題名（英文）Systematization of Taikoki prose works focusing on the relationship between books and power - Focusing on the early to mid-early modern period -

研究代表者

竹内 洪介（Takeuchi, Kosuke）

就実大学・人文科学部・講師

研究者番号：60963139

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、豊臣秀吉の伝記的資料である太閤記物散文作品群の諸書・諸本を収集し、権力者との関係に注目しつつ分類・整理して体系化することを目指した。特に本研究では、『太閤記』を中心に取り上げるとともに、小牧・長久手の戦い等、秀吉が活躍した戦いに注目して『絵本太閤記』や『絵本豊臣勲功記』など、近世後期の太閤記物も検討に含める形で考察した。最終的に、近世期における太閤記物の展開を、近世前期太閤記物を中心に辿り、文学が政治権力等、社会的要因によって変容するさまを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は従来歴史学的考証の視座からのみ構築されてきた太閤記物の基礎研究を文学的視座から捉え直し、初めて体系化しようとする点に学術的意義がある。豊臣秀吉は大河ドラマでも頻繁に取り上げられるなど、社会的に関心の高いテーマであるが、本研究は秀吉のイメージが定着・展開した近世期の太閤記物を改めて総合的に整理・分析するものであり、社会的訴求力が高いものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to collect the books of the Taikoki prose works, which are biographical materials of Toyotomi Hideyoshi, and to classify, organize, and systematize them, focusing on the relationship with those in power. In particular, this research will focus on the Taikoki, as well as the battles in which Hideyoshi was active, such as the battles of Komaki and Nagakute, and will focus on the Taikoki of the late modern period, such as the Ehon Taikoki and the Ehon Toyotomi Kunkouki. We also considered objects by including them in the study. Finally, I traced the development of Taikokimono in the early modern period, focusing on Taikokimono from the early modern period, and clarified how literature was transformed by social factors such as political power.

研究分野：日本近世文学

キーワード：日本近世文学 豊臣秀吉 歴史学 軍記 仮名草子 写本 実録 読本

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近世期全体に亘って、散文・韻文・演劇・絵画等、あらゆるジャンルに展開した〈太閤記物〉は、近年、学際的・国際的で新たな研究テーマとして脚光を浴びている。その顕著な例として、秀吉の歴史学的・文学的研究における学際性に光を当てた堀新・井上泰至編『秀吉の虚像と実像』（笠間書院、2016年）、演劇作品群を整理した原田真澄「太閤記物関連演劇作品についての基礎的調査研究」（若手研究（B）、2017年4月～2020年3月）、東アジア研究の視座から秀吉の朝鮮出兵に関する文芸を扱った金時徳『異国征伐戦記の世界』（笠間書院、2010年）が挙げられる。これらの成果は、〈太閤記物〉に『平家物語』や『太平記』のような文学的価値があること、それに対して近年の歴史学も注目していることを示している。

上記の研究の基盤となる〈太閤記物〉散文作品群を歴史学的見地から整理・分析した桑田忠親『太閤記の研究』（徳間書店、1965年）は、現在の〈太閤記物〉研究の根底を成す先駆的業績である。ところが近年になって、『天正記』や『豊鑑』の原本等、同作品群に関する多数の重要文献が新たに見出された結果、『太閤記の研究』の情報を基礎にしては研究が成り立たなくなってきた。また、「史実」を重視する当時の歴史学的考証によって整理された結果、〈太閤記物〉の研究は近世前期の史料に偏り、近世中・後期の文献整理・研究は簡略化され、誤解も少なくない。それは、近世後期に展開した〈太閤記物〉の基盤を成す『太閤真蹟記』と『重修真書太閤記』の成立順について、桑田氏が本来の順序を逆に示してしまったように、同書の誤解を受けて現在の研究が進んでしまっている問題が散見される状況からも明白である。しかし、文学的見地および近年の歴史学的視座からは、時代的偏重なく〈太閤記物〉を整理・分析し、その作品の成立した時代に見合った評価を多角的視点から下すことが求められている。以上、〈太閤記物〉に文学的価値が見出されている現在、改めて〈太閤記物〉の基礎研究を成し遂げることが喫緊の課題として立ちだかっているのである。

上記の要点を端的にまとめると以下の三点となる。

(ア)『太閤記の研究』の刊行時点におけるデータには大幅な更新・改訂が必要である。

(イ)『太閤記の研究』を基盤とする現在の研究の道筋を是正する必要がある。

(ウ)現在の研究に貢献するには、文学的視座から〈太閤記物〉を体系化する必要がある。

こうした点を踏まえ、報告者はこれまで『太閤記の研究』の内容を訂正、あるいは発展させ、〈太閤記物〉体系化に向けた準備を整えてきた。そしてその過程で、〈太閤記物〉が近世初頭期および近世後期～末期ともに共通して、その時代の権力者による政治的影響を強く受けて成立しており、同作品群の展開が近世文学の一側面を通史的に示すこともわかってきた（右図）。この点から、〈太閤記物〉の体系化が近世文学の評価軸を構築する上で有用なのではないかという問題意識を得て、本研究を立案した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、〈太閤記物〉散文作品群を徳川将軍家および大名家等の権力者との関わりに注目しつつ分類・整理して体系化し、その展開から書物と権力の関係が変容するさまを通史的に闡明して近世文学史上に位置付けることである。体系化した〈太閤記物〉を基軸に、書物と権力の関係を通史的に解明するとともに、これを近世文学研究における一つの評価軸としても構築・提示する。既に近世初頭期および近世後期～末期の主要な〈太閤記物〉の展開は解明しつつあるため、本研究では特に近世前期～中期の〈太閤記物〉の展開を中心に考察した。

3. 研究の方法

近世前期から中期に成立した主要な〈太閤記物〉である『天正軍記』『豊鑑』『豊臣秀吉譜』『川角太閤記』『太閤記』の成立および出版、流布の状況を分析する。各書が当時の権力者と如何に関係したかを考察し、近世前期から中期における書物と権力の関係を浮き彫りにする。最終的に今までの成果と併せて一本の評価軸を構築する。研究手法は本文批判・比較などの資料読解に基づく研究に加え、料紙・装訂・筆蹟に注目した書誌学的検討も視野に入れ、幕府の政令や古文書、浮世絵や屏風などの絵画資料にも歴史学的・美術史的知見から目配りする。調査対象資料は原則として原本調査の上で書誌学的検討を施し、その上で諸本検討を行う。

4. 研究成果

上記のような研究目的・研究計画の下、本研究では下記のような成果を挙げた。

〈図書〉

- ・家康徹底解説（共著、堀新・井上泰至編、文学通信、2023年）

〈論文・コラム〉

- ・住吉大社にある『絵本太閤記』（「住吉さんと太閤さん」第五回、住吉大社社報『住吉っさん』第39号、2022年）
- ・住吉社奉納連歌巻をめぐって（「住吉さんと太閤さん」第六回、住吉大社社報『住吉っさん』

第 40 号、2023 年)

- ・オーストリアの秀吉関係絵画群をめぐって (上) (「住吉さんと太閤さん」第七回、住吉大社社報『住吉っさん』第 41 号、2023 年)
- ・天理図書館蔵『絵本豊臣勲功記』について (2020 年度～2023 年度 科学研究費補助金 (基盤研究 (A)) 研究成果報告書戦国『軍記・合戦図の史料学的研究』(課題番号 20H00031)、2024 年)

〈発表〉

- ・太閤記の構成—小牧・長久手の戦いに関する検討を中心に— (2022 年度日本近世文学会秋季大会)

上記研究手法にあげた五書のうち、最終的に主に『太閤記』を中心とした研究に終始してしまったことは、もちろん力の及ばなかったところではあるのだが、主に下記の三点が原因として想定される。

- ①事務処理上、予算の執行開始時期が 2022 年度後半に偏ってしまい、予算の執行がおくってしまった。この事態は当然予想されるべきではあったが、予算執行に伴う事務作業が公務と重なり、予定していた以下の執行状況に収まってしまった。
- ②調査・研究を進めた結果、豊臣秀吉の主要な伝記的資料だけでなく、たとえば賤ヶ岳の戦いや山崎の戦いなど、秀吉が参加した主要ないくさの伝承に関する展開も併せて考察する必要があることが判明した。また、秀吉時代を舞台とする仮名草子の調査・分析も重要と考える。
- ③さらに、オーストリアにおいて近世初期に秀吉について記された『著名武将列伝』と思われるものを見出した。その他、オーストリアおよびイタリア、および韓国・台湾に本研究課題を遂行するために役立つ秀吉伝の善本が複数残っており、調査して適宜紹介した。

①については計画上の不備と言わざるを得ないが、②③については当初の研究計画が極めて発展したと云うるものであり、既に本研究課題の期間中に成果を発表することができている。②については当初計画案を含める形で、『天正軍記』『豊鑑』『豊臣秀吉譜』『川角太閤記』および近世中後期を比較する形で秀吉が参加した主要ないくさの伝承に関する展開も併せて考察することができおり、今後研究成果を発表することで、各作品の関連性を明らかにすることができると思う。また、③については当初『絵本太閤記』や『豊臣秀吉譜』の諸本調査の過程で明らかになったものであり、予想外のことながら近世前期におけるヨーロッパでの太閤記物の展開を明らかにすることができるものと思われる。したがって、当初の研究計画を完全に達成したわけではないが、結果的には当初の研究計画以上に研究が進展した結果、より複層的・複合的に研究が進んだものであり、本研究計画の価値をいささかも損なうものではない。幸いなことに本科研の継続プロジェクトとして「書物と権力の関係に注目した太閤記物の体系化と近世文学史への活用に関する研究」(若手研究、2024 年 4 月～2029 年 3 月) が採択されたため、本成果を生かしてより高度な視点から本研究計画を改めて進展させたいと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 竹内 洪介	4. 巻 39
2. 論文標題 住吉大社にある『絵本太閤記』（「住吉さんと太閤さん」第五回）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 住吉大社報『住吉っさん』	6. 最初と最後の頁 11-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 竹内 洪介	4. 巻 40
2. 論文標題 住吉社奉納連歌巻をめぐって（「住吉さんと太閤さん」第六回）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 住吉大社報『住吉っさん』	6. 最初と最後の頁 11-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 竹内 洪介	4. 巻 41
2. 論文標題 オーストリアの秀吉関係絵画群をめぐって（上）（「住吉さんと太閤さん」第七回）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 住吉大社報『住吉っさん』	6. 最初と最後の頁 15-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 竹内 洪介	4. 巻 なし
2. 論文標題 天理図書館蔵『絵本豊臣勲功記』について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 2020年度～2023年度 科学研究費補助金（基盤研究（A））研究成果報告書戦国『軍記・合戦図の史料学的研究』（課題番号 20H00031）	6. 最初と最後の頁 166-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 竹内洪介
2. 発表標題 『太閤記』の構成 小牧・長久手の戦いに関する検討を中心に
3. 学会等名 2022年度 日本近世文学会 秋季大会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 堀 新、井上 泰至（以上編者）、山田邦明、平野仁也、糟谷幸裕、丸井貴史、和田裕弘、菊地庸介、竹間芳明、塩谷菊美、桐野作人、原田真澄、原史彦、湯浅佳子、柴裕之、小口康仁、平山優、網野可苗、竹内洪介、黒田智、岡野友彦、森曉子、林晃弘、松澤克行、光成準治、曾根原理	4. 発行年 2023年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 388
3. 書名 家康徹底解読	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------